

おく
送りバント

年 組 ()

「絶対に、ホームランを打ってみせるんだ！」

リュウトは、野球の大会に向けて、毎日かかさずぶりをやってきた。

ホームランを打って、大歓声が起こる——。いつか、その瞬間を味わってみたい。

雨の日も風の日も、たえずバットをふり続けた。

そして、当日。

9回うら。2-3で、リュウトのチームは負けていた。

リュウトの番が回ってきた。これまで、リュウトにヒットはなかった。

かんとくは、リュウトに言った。

「送りバントで、ケンを送ってくれ。ここは、一点を確実にとろう。」

「でもかんとく——。ぼくは、ホームランを打ちたいんです。

ホームランを打てば、2点入るので、チームの勝ちです。」

「ここまでヒットがないのに、そんなうまくいくわけがないだろう。チームのことを考えなさい。」

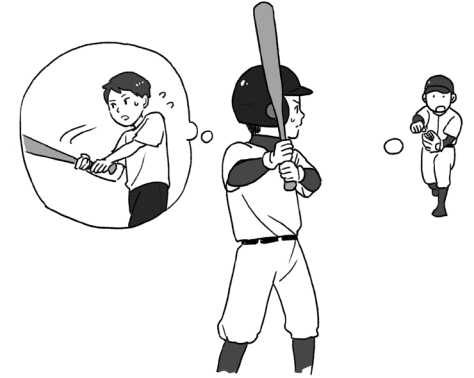
「はあ——。」

リュウトは、バッターボックスに立った。

ピッチャーが球を投げた。ずっと練習で意識してきたコースの球だ。これなら打てそうだ。

打つべきか。それとも、バントか。

リュウトはバットをにぎりしめた。



リュウトは、バントをするべきでしょうか。それとも、ホームランをねらってふるべきでしょうか。あなたの考えと理由を書きましょう。

.....

.....

話し合って考えたことを書きましょう。

.....

.....